

発達障害と不登校状態を重複して呈する児童に対する 臨床心理学的支援の探索的研究

東 山 弘 子 ・ 近 藤 真 人 ・ 木 下 幸 典 ・ 宮 崎 薫

抄 録

本論文の目的は、発達障害と不登校状態を重複して呈する児童を対象に、臨床心理士の訪問を実施し、学習支援とセラピューチックな関わりが、どのような効果をもたらすかについての可能性と可能性に沿ったふさわしい対応の在り方を、今回探索的に実施した3例の事例報告を

通して検討をすること、および今後の支援の在り方を検討することである。

キーワード：発達障害と不登校の重複児童、訪問学習支援、臨床心理、セラピューチックな関わり

I. はじめに

不登校問題に対する支援が20数年に渡って実践と実績が積み重ねられてきたことは周知の通りである。スクールカウンセリングの活動も実情と要請に応じて様々な支援の形が実施され、効果を上げてきている。担任とともに家庭訪問による親支援や不登校児童に対する対応の在り方についての報告もなされるようになってきている（長坂、2005 など）。

早期に担任の家庭訪問が有効に行われ、ほどよい距離を取りつつ家族や本人に前向きな声をかけたり、あるいは浮かび上がってきた何か生徒指導上の問題を解決していったりするなかで、その児童が再び学校生活へと戻っていけるケースを経験するが、早期の解決が困難なケースも多いのが事実である。対応する担任や教師たちが、経験知だけに基づいた対応をがんばり続け、児童が不登校になった“本当の原因”がわからないまま、膠着状態が続いたあとで、学校や医療機関のカウンセラーと児童本人とのカ

ウンセリング、適応指導教室やフリースクールでの集団活動などの支援を受けることになっていくケースも多いのが実情である。

その中でも、児童が自宅から出て第三者と会う意欲がないときや、なおかつカウンセラーと保護者との面談だけでなく、児童への直接的な支援が有効であると考えられるときにはじめて、心理の専門家による訪問面接という選択肢が立ちあがってくると思われる。

とくに現在の課題の一つとして支援の在り方が問われているのが、発達障害と不登校の重複児童に対する支援である。心理臨床家が訪問面接を行うことについては慎重に検討し、臨床心理学的支援の意義を十分果たしうる実践をすべきである（田嶋、2001）。

このことを今後の課題として認識したうえで、本稿では、N市において試行している「発達障害の傾向を呈する不登校児童に対する訪問支援」の試みについて報告し、今後の可能性について検討する。

Ⅱ．2010年度の支援の実際

本稿では、「かんがえユ一事業」の前身である臨床心理士による「訪問学習支援¹⁾」の実際について報告する。

＜対象＞発達に偏りが見られ、かつ長期の不登校状態にあると考えられる児童。

家族や学校それぞれによる要望をスクールカウンセラーが受けて、本人についての情報を収集した後、支援の実施が適当であると認められるケースを報告し、市教育委員会と臨床心理士とともに検討し、現実的な経費の事情により、3名の対象児童を決定した。テスターによる対象児童の発達検査（WISC-Ⅲ）を実施し、結果を受けて、児童への学習支援方針が見立てられた。市教育委員会によって選出された訪問担当者（臨床心理士の有資格者か、臨床心理学を専攻している大学院生）は1回に2時間、月2回のペースで児童の自宅を訪問した。なお、訪問担当者は月毎に市教育委員会と学校に対して支援内容についての報告書を提出し、随時スクールカウンセラーと訪問担当者が集まっの研究会やグループスーパーヴィジョンを実施。

以下はその事例報告である。

事例¹⁾

（1）事例の概要

クライアント：中2・男子（以下A君）

家族：父親（会社員）、母親（パート）、弟（小学生）

＜生育歴・問題歴＞ A君は小学校の時にも学校を休むことはよくあったが、中1の年末ぐらいから完全に不登校になった。きっかけはクラスの友達に嫌なことを言われたことのようにあった。クラスでの人間関係作りに難しさがあった。両親はA君の不登校については、A君が無理しないようにと温かく見守っていた。中1の終わり頃になって、先生の誘いで別室登校を始めた。やがてそこにいた他の別室登校の

男子と仲良くなったが、その子のペースに合わせてしまい、先生が飛ばしすぎではないかと思うくらい頻繁に学校に登校するようになる。先生が『大丈夫？無理してない？』と尋ねても、「大丈夫です」と平然と答えていた。しかし、その後A君は再び学校に登校できなくなってしまった。

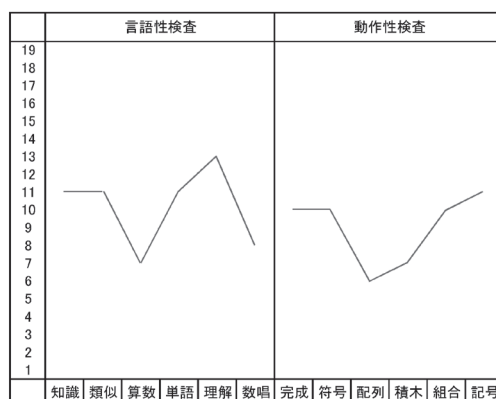
中2の5月からは週4回適応指導教室に通っている。

訪問への経緯：A君の母親はスクールカウンセラーとの継続面接の中で提案された訪問支援を希望し、訪問担当者が決定された。

＜アセスメント＞

WISC-Ⅲの結果：

言語性IQ104、動作性IQ90、全検査IQ97



見立て：検査中盤以降に明らかに疲れてきている様子であるにもかかわらず、テスターからの休憩の促しに対して頑なに応じなかった。A君が意識しにくい疲れに対しても、配慮が必要だと思われた。

聞いたことを覚えておくことに困難があり、書いて示したり、メモをとるように指導したりすることがよいと判断された。社会的な常識があり、説明力もあるが、「配列」の結果からは順序立てて考えることは苦手だと考えられる。たとえば算数はまず言葉で問題の意味を理解し、解き方の手順を典型的な例題を使って取得させ

るとよいと思われる。漢字や図形を捉えるのが難しい可能性があるので、できるだけ「意味づける」ように努力したい。また、現実の人間関係において予測が立ちにくいことも推測された。

(2) 訪問学習支援の経過

計 36 回（以下、#36 と表記）の訪問学習支援の経過を記載する。「」は A 君、〈 〉は訪問担当者、『 』はその他の発言を示す。なお、訪問学習支援は月に 2 回の頻度で行った。

（#1）初回は担任の先生と A 君の家を訪ねた。A 君は少し俯き加減で目のチェックが出て、緊張している様子であった。A 君の部屋に A 君、訪問担当者、担任の先生、母親が入って話をした。担任の先生が A 君に訪問指導の説明をしている間、A 君は俯き加減ながらも、「はいっ」と答え、しっかり話を聞いていた。訪問担当者が自己紹介をすると、訪問担当者の目をしっかり見て、「はいっ」と頷いていたが、この時も少し目のチェックが見られた。

その後、担任の先生と母親が部屋を離れて、訪問担当者と A 君の 2 人きりになると、部屋には緊張感が漂いはじめた。訪問担当者が改めて〈この時間やけど、別に勉強だけしないといけなわけじゃないし、この時間は好きに使ってくれたらいいから〉と言うと、A 君は「はいっ」とぎこちない笑顔を見せ、「やっぱり数学が苦手なんで…勉強は数学がやりたいです…」と緊張しながらもしっかり訪問担当者の質問に応えようとする姿勢が窺われた。

〈支援目標〉 A 君の対人面において過度の緊張も見られることから、学習の支援だけでなく、まずは訪問指導の時間が A 君にとって安心できる場となるように配慮しながら関わっていくこととした。

（#2 ～ #10） A 君は数学にかなり苦手意識を感じているようであったので、数学を中心に学習をしていくこととした。また小学校を休みが

ちであったこと、中学 1 年生の年末から完全に不登校であったことを配慮して、数学の基礎的な問題を中心に組み組んだ。さらに WISC-Ⅲの結果から、ことばの理解や操作が得意であることを活かし、ノートに問題の過程やポイントを書き写していくなどの支援を行った。また本人の学習に対して持っている積極的な姿勢を大切にしながらも、無理をしないように配慮しながら学習を進めていった。#2 ではセカセカと問題を解いていき、訪問担当者がくゆっくり。焦らなくてもいいからね〉と声をかけると、「はいっ」と応えながら黙々と問題を解いていくなど、A 君の数学への苦手意識、緊張感が伝わってきた。学習以外の時間は漫画やドラマの話など、A 君の趣味の話をして過ごした。#6 では二人でボードゲームをして遊んだが、A 君の口調が敬語でなくなることもあった。2 人で熱中して訪問担当者が〈これ難しいな～〉とつぶやいたときに、「でしょ～」と満面の笑み見せるなど訪問担当者との間でリラックスした柔らかいやり取りもできるようになってきた。#10 では、A 君が数学の問題プリントを解いた後に訪問担当者が間違いを指摘すると、「あっ、ほんとだ、ここが間違ってる」と丁寧に消しゴムで消して間違いを直すなど、意欲的に学習に取り組んでいる様子が窺えた。

（#11 ～ #35） A 君が中学 3 年生になり、高校受験へ向けての支援を行った時期である。#16 では訪問担当者が〈どこの高校考えているの？〉と尋ねると、A 君は「第 1 希望は〇〇高校考えていて、後は〇〇高校とか〇〇高校考えている」と真剣な表情で応えるなど、A 君からは高校進学に意欲的な姿勢が窺われた。そこで、訪問学習支援の時間の中で、高校とはどんな場所か、高校でやってみたいことなどを 2 人で話すなど、A 君の高校進学に向けての心の準備を手助けするように関わっていった。また学習面においても、数学を中心に受験勉強のサ

ポートを行っていった。#20では、「今は毎週水曜日和金曜日の放課後に中学校行っている、そこで勉強教えてもらっているけれど、こうやって先生と話していることも多い」と悪戯っぽい笑顔を見せるなど、A君のペースで無理せず中学校に登校できているようであった。#23ではA君の口から「今の勉強のペースで大丈夫なのか心配」と不安が語られることもあったが、訪問担当者はA君に寄り添い、励ましながらか支援を続けた。その後もA君は意欲的に学習に取り組み、#33にはA君から「高校合格した。自分の行きたい高校に行けてよかった」と笑顔で語られた。

(#36 最終回)「高校でしっかり勉強して大学にも行きたい」と訪問担当者に話すなど、A君から力強さを感じることができるようになった。また2人で漫画を読みながら「この場面が面白い」と話したり、一緒に音楽を聞いたりといつも見られた対人面における緊張、ぎこちなさはなく、リラックスした時間を訪問担当者と過ごせるようになった。最後は「先生が来て1年半経ったけど、すごく早く感じた」など、2人で今までの時間を振り返っての最終回となった。

(3) コメント

アセスメントが的確になされたことによって、行動だけでは理解が難しい本児の課題がはっきりしたこと、支援目標を明確に立てたこと、具体的な学習支援の在り方に工夫を加えられたことが有効であった。さらに、本児の特徴的人間関係を理解しつつ関わる努力を重ねたことが、大きな効果をもたらしたと考えられる。

事例2³

(1) 事例の概要

クライアント：中3・男子（以下B君）

家族：父親（会社員）、母親

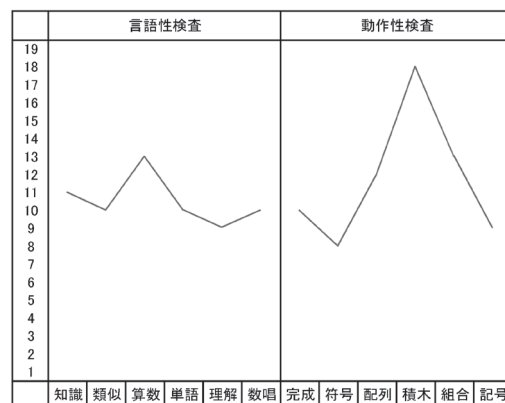
＜生育歴・問題歴＞B君は1年生の途中からぼつぼつ休み始め、学年が終わる頃には完全不登校になった。2年生の終わりの頃から適応指導教室へ休まず通っていた。しかし、適応指導教室でのイベントには参加することを拒んでいた。担任の先生は毎日学習プリントを持って家に訪問していたが、本人が拒んで家には上がらせてもらえたことはなかった。先生が学校に誘っても本人は頑なに拒んでいた。テストも中学校へ受けに行くことはなかった。

訪問への経緯：教員の推薦とスクールカウンセラーの提案に応じて、訪問指導がはじまった。母親面接のなかで発達障害が隠れている可能性が考えられた。母親はどうしてもそのことを認めようとしなかったが、訪問での学習支援には積極的であった。

＜アセスメント＞

WISC-Ⅲの結果：

言語性IQ104、動作性IQ115、全検査IQ110



見立て：下位検査でも評価点の高い項目が多かったが、その中で比較的「符号」と「記号探し」が苦手であることから、書くことや文字・記号を目で追うことは得意ではないと思われる。具体的な支援としては、大事なことを写したり、読みづらいときに指でなぞったりなどするとよい。

(2) 訪問指導の経過

(#1) 初回は担任の先生とB君の家を訪ねた。B君に部屋に案内してもらおうと、自分の持っているカードやゲーム、漫画の説明をしてくれたが、訪問担当者のくすごいね〜>などのリアクションには一応「そうでしょ」などと応えてくれるものの、訪問担当者が話す余地を与えない感じであった。B君のコミュニケーションの取り方に一方的なものが感じられた。

その後、B君が携帯型ゲームをしながら訪問担当者にゲームの説明をしてくれることになった。訪問担当者がゲームの合間に<学校から先生の事なんて聞いている？>と尋ねると、「大学院のお兄さんとだけ聞いています」とあまり表情の変化なく応えていた。そこで訪問担当者は<これからこうして会って行こうと思うんだけど、どうやってこの時間過ごしていきたい？>と尋ねると、おもむろに机から模試の結果を取り出し、「僕英語が苦手なんです、不登校だったので今英語やってるんですけど、まだ1年生の範囲が終わったばかりで」と応えた。英語に対して苦手意識をかなり感じていることが窺がわれた。

<支援目標> B君が苦手意識を持っている英語を中心に学習の支援をしていくこととした。またB君とのコミュニケーションのとりづらさにも配慮して、まずは訪問担当者がB君の興味のあることに寄り添い、じっくりと1対1でやり取りしていく時間をもつように心がけることとした。

(#2～#7) #3では、B君の集めているカードを1枚ずつ見せながら説明したり、携帯型ゲームをプレイしたりしながら「この技が強いんです」と訪問担当者に説明する姿が見られた。また訪問担当者が<普段はどうやって勉強しているの？>と尋ねると、「普段は1対2形式の塾に通っている。のんびりやりたい。〇〇教室（適応指導教室）ではのんびりできる、で

も学校は嫌」と顔を曇らせていた。

したがって今後の訪問指導の進め方としては、B君のペースを大切にしながら、訪問担当者とB君の間で今日学習する事、また〇時から〇分間勉強するなどの学習の時間を毎回話し合いながら学習を進めていき、B君が学習へのモチベーションを保てるように配慮することとした。#4～#5では携帯型ゲームを訪問担当者に見せた後、「宿題をする」と机に向かってセカセカしながらもしっかりと宿題を終わらせる姿が見られた。また#6では「自分でできそうところは昨日の夜にやったんだけど、難しそうで面倒くさそうところは先生に教えてもらおうと思って」と、訪問担当者のアドバイスを聞きながら学習に取り組む姿も見られた。

(#8～#24) この時期、B君との話の中で、ゲームや漫画の話だけでなく、B君の感じていること、受験や友達とのエピソードがポツポツと語られるようになった。#8では、塾の話をしていると、B君から「塾ではゆっくり勉強できているし、前より問題が解けるようになった、でも塾には学校行ってない事を言っていない、なんか言うタイミングを逃して、だから学校で勉強につまずいているからってことになってる」と言いにくそうに語られた。#19では、B君から「いつも4人ぐらいでゲームしたりしてるんだけど、今日このキャラクターもらったやつは小さいやつ。中2と中1がいて、3年は僕だけ」と友達の事が笑顔で語られた。また受験の話になると、「この前高校見に行っただけど学校行ってない人は厳しいみたい、芸術クラスは行けるみたいなんだけど、そんなの行きたくないし、父親もそんなのやめとけて、だからこの高校には行かない」と語られた。

この時期、B君の学習に取り組む姿勢として、学習の時間を確保することが難しくなっていた。「今日は何もする事がないからゲームしとく」などの言葉が出ていた。そこで、訪問担

当者はB君と話し合い、B君の中学校と連携して英語のテキストをもらい、そのテキストを中心に学習していく事にした。その結果、B君は自発的に英語のテキストに取り組むことができるようになった。そして#20には、「合格は母親からのメールで知った、何回も本当に受かった?って確認した」とB君から笑顔で高校に合格したことが報告された。

(#25) 最終回では、訪問担当者はB君との間で高校生活の見通しがもてるような話をすることを心がけた。その話の中で、B君からは「高校行くと自分の嫌いなこともいっぱいありそうだけど、まあ我慢できると思う」と語られ、最後は「高校頑張るわ」と笑顔も見られた。

(3) コメント

アセスメントを重視し、支援目標を明確化したことにより、支援効果が上がったことがわかる。担当員のセラピューチックな関わりによって、人間関係の樹立へとつながったケースである。

事例 3⁴

(1) 事例の概要

クライアント：小3・女子（以下Cさん）

家族：父親（会社員）、母親（主婦）、姉（小5）、妹（幼稚園年長）

＜生育歴・問題歴＞ Cさんは、三姉妹の次女である。就学後から母親が学校に付き添う時のみ登校するということが多く、訪問担当者が支援に入った時には長く不登校が続いている状態であった。そのため勉強は遅れ、本人も苦手意識を強めているようだとのことであった。担任教諭は時々放課後に、漢字の学習を見てあげていた。発達検査の結果からは、言語性が動作性に比べてやや低く、言語理解の弱さが目立った。また、注意集中も弱さがみられた。検査で迷うと自信なさげに検査者の方を見るという指

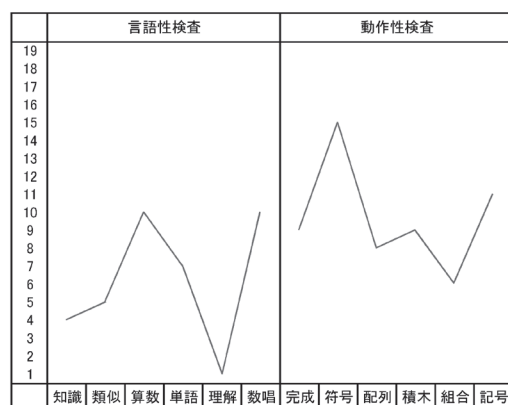
摘もみられた。

訪問への経緯：スクールカウンセラーのところへ相談に来ていた母親に、カウンセラーの方から提案した。勉強や人間関係でのつまずきがあり、無理に学校へ来させようとしても難しいと考えられた。

＜アセスメント＞

WISC - IIIの結果：

言語性 IQ71、動作性 IQ96、全検査 IQ81



見立て：最初は母親の後ろに隠れて覗き込むようにテスターを見ていた。その後、着席してテストをはじめると涙を流していた。しばらくすると落ち着き、母親がついて最後までやり終えた。母子分離ができにくい状況がうかがえた。

言語性のテストではなかなか答えられず、かなり時間をおいてから自信のなさそうな小さな声で、単語で答える。わからないときは下を向いて黙っている姿からは、やさしい問題からはじめて自信がついていく働きかけが有効ではないかと推測された。

得意な動作性のテストの中で「組合せ」が苦手なことから、わかりやすく学習できるように視覚的イメージを示すとしても、全体像が掴めるものが有効だと思われる。

(2) 訪問指導の経過

(#1) 初回ということで、漢字ドリルをやる

ことになる。やり方はこれまで担任教諭としてきた方法（ノートに練習した後、訪問担当者がテストを作って実施する）で行うことにした。

観察していると、字数の多い漢字では、字の写し間違いが多くみられた。また、字を丁寧に書くことに熱中するところがあり、その字の読みや意味理解が不十分のままで終わる傾向があった。そのため、その場でのテストには正当できるが、教科書の中で読むとひっかかってしまうという状態であった。そこで、練習した漢字から派生する単語や熟語について、訪問担当者が絵を描いたり、教科書から一緒に写真などを探したりして、漢字をしっかりとイメージして理解できるようにした。

＜支援目標＞発達検査の結果と活動を通じた観察から、①環境調整：2人の時間を確保。課題の量を無理のない量に調整。②興味関心があるものを活動に取り入れる：クイズの導入など。③言葉の意味理解を深める：イメージしやすいような説明。④学習スキルを身につける：辞書の使用方法を伝える、を意識して支援活動を行う。

（#2）この日はすぐ勉強部屋に移動はするものの、なかなか勉強態勢にはならず、落ち着かない様子であった。そこで、Cさんの持っていたポケモンのクイズ本を利用し、Cさんにクイズを読み上げてもらい、それに訪問担当者が答えるということにした。また、読み上げるときに間違えたら、Cさんにマイナスポイントとし、訪問担当者のクイズの正解率と勝負するというようにした。読みは引かかってしまう場面も多かったが、クイズの出題者という意識も強く、注意深く大きな声で読み上げることができた。また、分からない言葉については「どういう意味？」と自分から聞いてくることも多く、前回同様に、一緒に意味を調べて話をすることも多かった。

勉強後には、「あのね、これは内緒なんだけ

どね…」と、不登校中の心境や、家族についての想いなどをポツポツと話してくれた。

（#3）この日は勉強に三女や犬も同席させながら、しばらくリビングで過ごす。母親に注意されて部屋に移動後は、ピアノを弾いてしばらく過ごす。＜今日はドリルって感じじゃないな。勉強はいろんなやり方があるんだから、Cさんが無理しない時間にしよう＞という、笑顔になる。Cさんの提案で、再びポケモンクイズをする。

その後、訪問担当者の考えた『漢字探しゲーム』をする（Cさんに教科書から好きな漢字を選んでもらい、その選んだ漢字を書いた漢字カードと、それと対となる読みカードを作る。それを何セットか用意し、まずは読みのカードだけ机に並べ、漢字カードはCさんが目をつぶっている間に訪問担当者が部屋中に隠す。その後Cさんが漢字カードを全部見つけ、読みカードと正確にペアにしていこうというもの）。Cさんはこれに夢中になり、自ら「今度は○分以内に終わらせる」など積極的に取り組む。また、ペア間違いになったカードについても『レベル2』と難易度をつけて、間違わなくなるまで行った。間違わなくなった漢字については教科書に印をつけ、「今日はここまでいった！」と、達成感も持たせるようにした。

終了後は、カードを大切に箱に入れ、「これはレベル2カードね」などと話をした。

（#4）勉強部屋に移動後すぐに前回のカードを取り出し、「今日はどれにしようかな」と自分から新たなカード作りも始める。ペアにする時間も徐々に短くなり、隠す方を読みカードに変えるなど自分でいろいろと工夫を凝らす。途中で長女が参加するが、ペアにするところはCさんが全部行い、長女に『すごーい』と驚かれると、「もっと早くもできるよ」と自慢する。また、長女がヒントを出そうとすると「自分でわかる！」と拒否することもあった。

(#5～#6) この頃には勉強時間にも流れができ、前半にはカード作り、休憩に一曲ピアノを弾いて、後半にカード探しをするようになる。

漢字は教科書の3分の1ほどはスムーズに読めるようになった。難しい漢字や単語が増え、意味を調べるときには辞書を使うようになり、

どちらが先に意味の書かれてあるページを見つけられるかを訪問担当者と競争しようとするなど、楽しんで行うことができた。勉強後の休憩時間には姉妹も一緒になって、Cさんの学校での様子や、両親について話をする。

以上の過程を振り返ると、短期間ではあったが、発達検査を利用することで、勉強を進めていく上での方針を持って支援を行えたと思う。また、常に姉妹と一緒に過ごしているCさんにとっては、訪問担当者と2人で過ごす時間というのは新鮮な時間であり、最初はその時間や訪問担当者の立場に戸惑いも見られたが、次第に自分なりの過ごし方を見出し、休憩後に学校に行けなかった日の事や家族の話をするなど勉強以外の交流も多く感じられた。

(3) コメント

次年度も引き続き訪問学習支援を希望され、担当者の引き継ぎが必要となった。引き継ぎ時のインテーク面接を男性インテーカーが行おうとしたが、本人は頑なに拒否。彼女の希望どおり、女性の担当者が引き継いでいるが、関係障害の課題が深く、慎重に関わっていくべきである。

Ⅲ．考 察

研究事業を継続するにあたり、以下の各項目について検討することが指摘される。

(1) 3例の事例を検討すると、臨床心理士の訪問支援が有意義であることが明らかとなった。学校における母親のカウンセリングによっ

て、児童の心の変化、成長のプロセスを見守り、「待つ」という基本方針と同時に、訪問による児童への適切なセラピューチックな関わりと学習支援を行うことによって、確実な心の活性化と学習効果が上がることが期待される。

突然訪れた自分の子どもの不登校状態に対して不安定になりがちな母親の精神状態は、継続的なカウンセリングで落ち着きを取り戻すことは多い。当初は「(元通り学校に通い出すために)何をしたらいいのですか」と周囲に強く訴えていた母親も、学校に行くか行かないかではなく、児童の内面や児童と母親自身を含めた周囲の関係にやがて目を向けるようになる。関係する周囲の人たちが支援者の支えをもとに、心を落ち着け、腰を据えて、じっくりと子どもに関わっていこうという心の態勢ができれば、児童の内的変化がはじまり、周囲の人たちもその事実を認めながら、変化を「待つ」ことができるようになっていく。

鷲田(2006)は「待つ」ことができなくなった現代社会の時間感覚について次のように指摘している。「せっかちは、息せききって現在を駆り、未来に向けての深い前傾姿勢をとっているようにみえて、じつは未来を視野に入れていない。未来というものの訪れを待ち受けるということがなく、いったん決めたものの枠内で一刻も早くその決着を見ようとする。待つというより迎えにゆくのだが、迎えようとしているのは未来でない。ちょっと前に決めたことの結末である。決めたときに視野になかったものは、最後まで視野に入らない」と。「待つ」ことは、母親のカウンセリングにおいてと同様に、児童への訪問学習支援においてもキーワードになってくると思われる。支援にあたってアセスメントを行い、訪問初回に心理臨床を専門とする訪問担当者が児童に直接会って感じとったことも加味しつつ、支援目標を立てる。支援目標を明確にしすぎることは、ともすると支援する側が

決めた枠組みに児童を合わせさせてしまう危険性があるけれども、そうではなくて、事例の随所に見られたように、訪問学習支援では「決めた時に視野になかったもの」が到来する可能性も静かに待ち続けているのである。

その意味で、訪問学習支援に必要なポリシーは「doing にして being」であるといえよう。訪問担当者は学力の向上に向けて最大限働きかけつつも、同時に児童との関係の中で生まれてくる未知なるもの（自然治癒力）に対して、ただそこにいて心を開いている。

（２）この事業は、N 市教育センターと佛教大学大学院臨床心理学専攻研究室が協力して発足したもので、今後の発展のためには特別支援担当部門と心理教育部門が機能的に協働して推進していくことが求められる。また、学校、教員、保護者、スクールカウンセラーなどの協力体制が求められる。

（３）具体的な支援の在り方として、以下の点が見えてきた。

- ① 確かな支援は、確かなアセスメント、インテーク面接、見立てがなければならない。保護者の希望、担任、スクールカウンセラーからの情報収集に基づき、支援目標を明確にすることが効果的である。
- ② 学習教材の選択について。教材自体を選ぶところからはじめるやり方が一つ。もう一つは、教材は決めておいて、それをどのように使ったら児童が学習しやすいかを考えていくやり方があると思われる。前者の場合、アセスメントで得られた児童の発達の偏りに関する情報、そして訪問担当者による初回面接で得られた児童の興味・関心に関する情報を、その学年までに習っていることに照らして、学習教材が自ずと決まってくる。もちろん児童に示しても乗り気になりにくい場合にも考慮して、いくつか用意しておく必要がある。一方で後者の場合は、テキストをたとえばクラスメイトが学校で使用しているのと同じものにして、児童がそれをどのように用いると学習しやすくなるのかという視点で進めていく。例を挙げると、意味理解が弱く、視覚優位な児童には、図表をふんだんに用いた解説書などがわかりやすいであろう。

- ③ 訪問担当者に対するスーパーヴィジョンは必須である。アクトアウトは動きはじめた時に起こり、転移・抵抗を起こした時にリスクとなる。

N 市では別事業で公募に応じた一般大学生による訪問指導が実施されていた。その中の一事例では、児童との関係が付いてきたと思われる時期に、児童が自分の秘密基地と見立てた自宅の屋根へと担当者の目の前で登ろうとしたことがあった。児童が安心できる他者の見守りの中で秘密基地を作るということ自体は、心理臨床学的に内面の形成と関わっており、非常に大切な出来事である。しかし、相談室のような安定した枠の中ではない、家庭という場所では、その成長する上で大事な出来事も一転して危険と隣り合わせになりうるのである。家庭という日常環境と非日常的心の関わりが交錯するということをわきまえるには、心の専門家としての臨床心理士が担当することが重要なキーポイントとなり、この担当者を支えるスーパーヴァイザーの存在が必須である。

Ⅳ．今後の課題

この事業は始めたばかりで課題は多いが、時間をかけて、確実なデータを蓄積し、持続的に検討することによって、確かな結果を出せると確信する。

【注】

1. 2003年にN市内T学区において立ち上げられたNPO法人において臨床心理士として活動していた杉森基子氏を中心に、確かな見立てに基づく家庭学習支援を実施し、効果を上げていたことがヒントになり、N市で訪問学習支援として発足し、その活動が基盤となって、2012年4月からN市の事業として「かんがえる」事業として新たに出発することになったものである。
2. 事例1の担当者は、木下幸典である。
3. 事例2の担当者は、木下幸典である。
4. 事例3の担当者は、宮崎薫である。

【参考論文】

- 長坂正文（2005）：不登校生徒への訪問支援．臨床心理学5－1－特集不登校．金剛出版
- 田嶋誠一（2001）：不登校・引きこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点．臨床心理学1－2－特集スクールカウンセリング．金剛出版
- 鷺田清一（2006）：「待つ」ということ．角川選書

【謝辞】

N市において「訪問学習支援」の実施に御尽力され、本稿をまとめるにあたり、多大の御指導をいただいた臨床心理士杉森基子氏に心より感謝申し上げます。